



図3 ズレックとベンツが計算した、ブラックホールの周りを回転するトーラスの進化。上の4葉は赤道面上での密度分布(等高線)と速度分布(矢印)を、下の4葉は回転軸を含む面での密度分布と速度分布をあらわしている。右へ行くに従って、トーラスの中心が1回転する分だけ時間が進んだ状態が描かれている(Zurek & Benz, Ap. J., 308, 123, 1986, Fig. 1).

やっと第1歩を踏み出したばかりの段階にあり、これからの進展が期待される分野である。

紙面の都合から省略した事柄の中から、最後にひとつだけ補足して筆を置くことにする。

カウリングに比べたら28年も遅いが、パパロイゾウとプリングルの論文よりは5年も早く、回転している流

体が不安定であることを発見していた人がいるのである。彼の名はドゥルーリー。彼はそれを1979年に学位論文として書いたが、学術誌に掲載されたのは1985年だった。出版が遅れたのは論文の正しさを周囲の人に理解してもらえなかった為らしい。これも科学史のひとつまかもかもしれない。

雑 報

変光星ブレテン (Variable Star Bulletin) の発行

最近、日本のアマチュア変光星観測者・研究者の活躍は目ざましく、国内だけで埋れさせておくことは勿体ないという考えから、古畑正秋先生を主導者とし、日本の主な変光星観測者・研究者の自主的刊行物として表記のブレテンの第1号が、日本変光星観測者連盟から1987年6月に発行された。

第1号には、Photographic Observation of KR Aur in 1985/1986として、藤野祐弘、古畑正秋氏ほかの観測結果が記載されている。他にSS CMaの周期(小城正己氏)、PW Vul(渡辺氏)などの観測記事を見ることができる。編集助言者としては古畑正秋氏、編集者に西城恵一氏、他に佐久間精一氏などが名を連ねている。1987年10月現在、第3号までが発行されているが、毎号A4判、4頁立ての英文からなっていて、国外へもかなりの部数が送付されている様子である。

戦前の天文月報や東京天文台出版物を見ると、多くの変光星観測者の多数の変光星観測が発表されている。これに代るものとしては、故・神田茂先生により日本天文研究会が「日本天文研究会回報」や「日本天文研究会報文」に、また、現在では同会の観測月報に変光星光度の極大、極小の日付や光度を発表していた。しかし、これらの観測は主に目測による値であったが、最近では写真や、光電管による観測へと進み、精度も大きく向上した。このような背景のもとに、今回のVariable Star Bulletinが発行されたものと推測される。古畑氏による発刊の辞にも、「世界の同学の士にも(データ等を)提供したく、このBulletinの発刊を実現させた。観測報告を主とする表や式、図などが主である。これが大いに利用されて、よいものが多く生まれ、実のある観測・研究が盛んになることを期待する」と記してある。不定期刊行物であるが、日本の変光星観測者の総意ともいえるこのブレテンの、幾久しい発展を期待している。

(香西洋樹)